

長沢鼎のさらなる帰国と様々な苦難と永遠の別れ

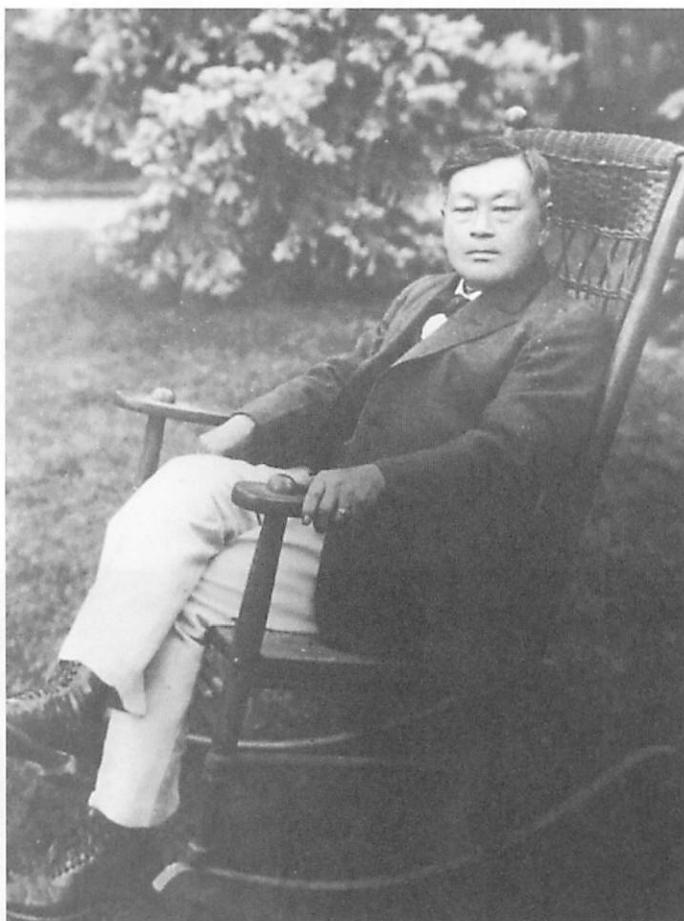
森 孝 晴

1. 長沢の大病と第3回目の帰国

ハリス夫人、つまりダビーおばさんが亡くなった1916年の9月に長沢は盲腸炎で生死の境をさま迷った。『プレス・デモクラット』紙に「危篤」と報じられたほど重体であったが、運よく数日後には快方に向かった。そして回復すると医師が旅行をするよう勧めたので、二回目の帰国することに決めたのである。



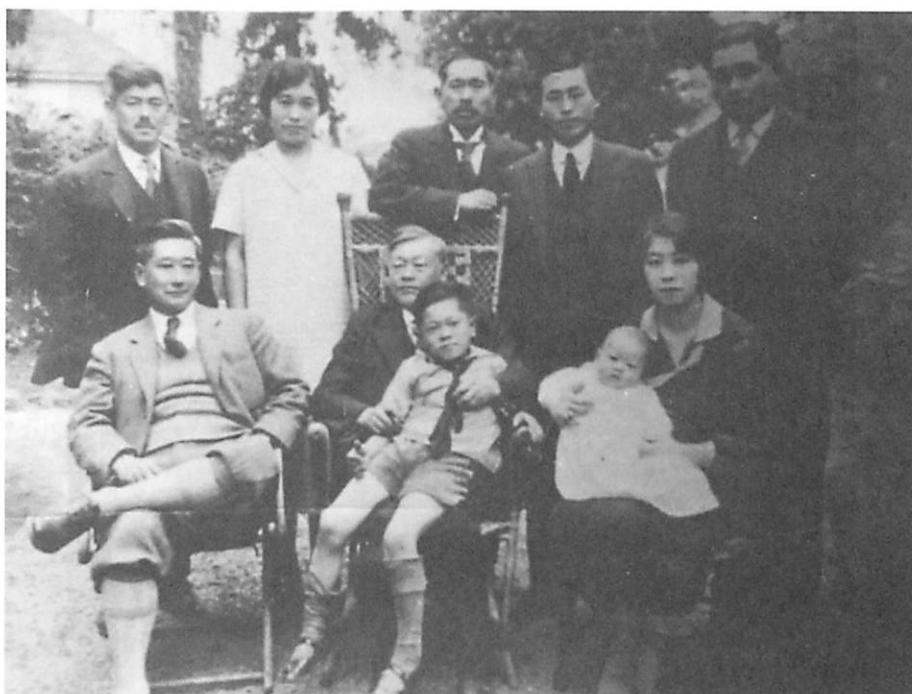
右端が60歳代の長沢。一番前に座っている眼鏡の女性が晩年のダビーおばさんことハリス夫人だと思われる



60歳代後半くらいの長沢

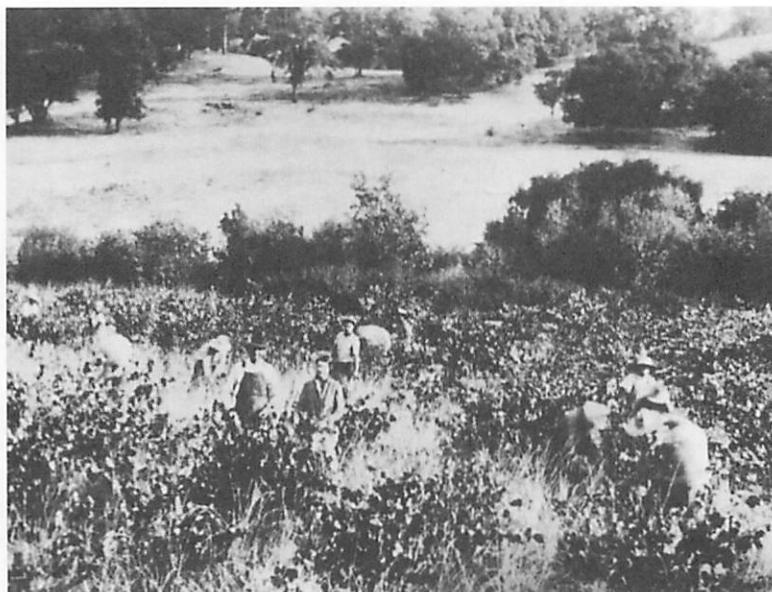
この時すでに長沢死去のニュースが日本に送られてしまっており、それは1916年9月20日付の鹿児島新聞に報じられ、誤報は拡散していた。したがって長沢が1917年（大正6年）の早春に鹿児島に着いたときには、彼は死んだことになっていた。65歳の時であった。この旅の目的は共喜の嫁探しであったので、伊地知共喜を伴っての帰国であった。長沢は鹿児島市草牟田町の梅田ヒロ（25歳、梅田治辰・エツの四女）を選んでやり（当時は普通のことであった）、共喜とヒロは鹿児島で3月16日に挙式をしたうえで帰りは3人でサンタローザに戻った。

ヒロが家族に加わったことは長沢にさらなる安息を与えた。ヒロは母屋に入り、嫁としてよく尽くした。1917年7月には姉のモリ（共喜の母）が亡くなるという不幸もあったが、すでに触れたように、1902年にはすでに甥の佐々木英吉が加わっていたし、1919年に共喜とヒロの間に幸介も生まれた。伊地知家の3人は長沢と母屋に同居していたので、にぎやかな家族になっていた。



家族とともに（75歳くらい。共喜〔後列真ん中〕・ヒロ〔その左隣〕夫婦
や幸介〔長沢に抱かされている〕・エイミー〔その右〕と）

ファウンテングローブ農場の長沢はどんな人物であっただろうか。日本人は皆、「おじさん」という意味で愛情を込めて長沢を「オジ」と呼んだそうだ。人種に関わりなく、皆が彼を厳格だが寛大で公平だとみなしていた。長沢には厳しいところがあり不正なことは大嫌いであったが、農場の労働者たちと親しく交わったのである。昼食をともにし、一緒に腰を下ろして皆にワインを注いでやり、自ら音頭をとって乾杯をした。これを見た白人には意外な風景だったかもしれない。



ファウンテングローブ・ワイナリー農場での労働

皆は長沢がきちんとした大学教育を受けた人とみなしたし、そう思わせるほど堂々と弁じた。彼と親しくしていたホームドクターのドクター・ボナベントゥーラも、長沢を賢く教養ある孤高の人と見ていた。ドクターが長沢にその人生について尋ねようとする、長沢はそれを巧みに避けたそうだが、これもまことに長沢らしい謙虚さであったろう。成功物語や冒険談を語ることはできるが、それは往々にしていやらしい自慢話になってしまうからである。



70歳くらいの長沢



長沢のブドウ園遠景

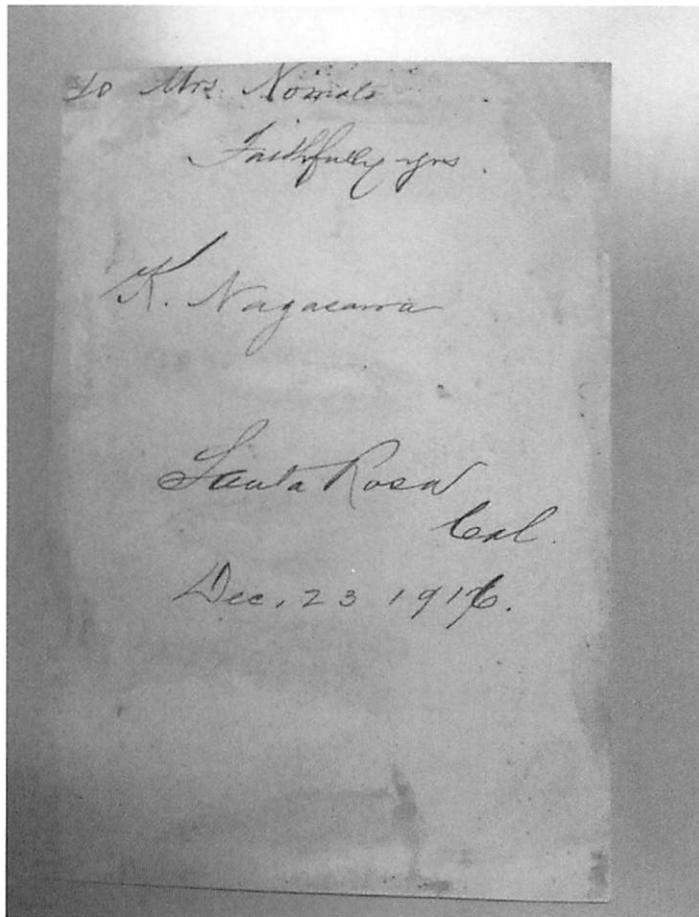


銃を構える長沢 (珍しい写真。60歳代後半か。
さしずめ「アメリカの侍」というところか)

2. 第4回目（最後）の帰国

あとで述べるように様々な苦難に見舞われるようになった長沢は、健康状態の良い時期をねらい1923年（大正12年）に第4回目の、すなわち彼にとって生涯で最後となる帰国の旅に出かけた。71歳の時であった。今回は禁酒法で苦しい中で多角経営に踏み出すきっかけをつかむのが目的だった。この時は幸介とヒロが一緒に、7月10日に鹿児島に着いている。すでに触れたように姉のモリは1917年に亡くなっていたし、弟の赤星弥之助も1904年に亡くなっていた。残っていたのは弥之助の長男の赤星鉄馬ほかの甥や姪たちだった。また、鹿児島はかなりの変わりようだった。長沢は寂しい思いをしたと思われる。

彼にはこれが最後の帰国になるという自覚があったかもしれない。渡辺正清によれば、できるだけ多くの旧知の人に会おうとしたそうだし、東京で甥の赤星鉄馬の家に泊まり、この旅の中で箱根や京都や比叡山を観光して回ったそうだ。



長沢が1916年に長姉トキの親族「野元夫人」
に送ったカード（64歳の時）



そのカードの裏は長沢（64歳）の写真になっている。

3. 長沢の様々な苦難

当時日本人がアメリカで成功を収めることはまれであった。そんな中で例外的にアメリカの夢を果たして成功者となった長沢は、その地位を固めさらに高めつつあり、富を蓄え豊かな生活をエンジョイしていた。意外にも感じるかもしれないが、彼は頻繁に母屋の食堂でパーティーを催していた。これを女主人として取り仕切ったのはヒロであった。彼女はこの大邸宅の主婦として家の管理や食事を指示していた。小柄なこのバロン（男爵）に会ってともに食事をするために多くの有名人がファウンテングローブにやって来るのだった。すでに触れたようにバーバンクやマーカムやロンドンがやってきた。少なくともバーバンクやロンドンは地方の名士というだけでなく、世界的な著名人でもあった。

しかし20世紀に入って中国や日本からの移民が激増していた。貧しい生活から抜け出してアメリカで夢をつかむためにやってくる人がほとんどであったが、白人たちは自分たちの仕事や居場所が奪われるのではないかと強く危惧した。「ジャポニズム」が流行ったりする一方で「黄禍」ということが叫ばれ、人種的偏見が地元主義とともに高まったのもこのころであった。そのため1906年には早くもカリフォルニア州議会は、日本人移民の制限に関する決議案を採択したのである。日本人排斥の運動はこのころからじわじわと始まった。1907年にはセオドア・ルーズベルトが「日米紳士

協定」を結んだので、日本は自国民のアメリカ入国を制限されることに同意することになってしまい、日本人移民は激減することになる。

また長沢が2回目の帰国をした1913年には、カリフォルニア州議会は「外国人土地所有禁止法案（いわゆる外国人排斥法）」を可決している。ただ、長沢はこの法律の公布以前に土地を持っていたということで幸いにもこの法律の影響を受けることはなしに済んだ。しかしながらアジア人、とりわけ勤勉な日本人に対する包囲網は確実に狭まりつつあったのである。カリフォルニアの日本人は次第に圧迫感を持つようになり重苦しさを感じていたが、これは偏見となってアメリカ全土に広がりつつあった。

状況は悪化の一途をたどった。1920年にカリフォルニア州議会は「排日土地法」を可決し、1923年には外国人がカリフォルニアで資産を所有できなくすることとなり、また生まれながらのアメリカ人以外の居住者は不動産などの資産の管理者になれないという厳しい方向が示されたのである。こうした世の中の動きは当然長沢にも暗い影を投げかけ、つらい思いをさせたであろう。

ところが苦難はそれだけではなかった。第3回目の帰国から長沢が帰国した2年後の1919年1月にあの悪名高い「禁酒法」が制定されたのだ。この法律は、アメリカ国内でのアルコール飲料の製造・販売・輸送・輸入・輸出などを禁止する愚かなもので、酒を飲むことを全く許さないというものではないものの、ワイナリー経営者の長沢にとっては大打撃であった。彼はこの年のうちにフリーマンに指示してニューヨーク事務所を閉鎖させた。1920年1月に法律が発効すると当然ながら海外販売もできなくなり、販売できなくなったワインが多量に残ってしまった。

さらに問題が持ち上がっていた。1919年にロバート・ハートがサンディエゴから長沢の経営に文句をつけてきたのだ。ハートは、会社の収益が繰り入れていた新生兄弟社の基金からすでに多額の金をひそかに得ていたし、人種的偏見の持ち主でもあったようだ。長沢はそれを大目に見ていたのだが、争いたくないので本意ではあったが、1919年のハートのさらなる分配を求める要求に対決することにした。彼は代理人のジョージ・キングをサンディエゴに送って交渉させた。長沢はこの事件に毅然と対応したので、結局ハートは要求を放棄しファウンテングローブの経営から手を引いた。しかしその後もフリーマンを間に挟んでしばらくやり取りが続き、とりあえず一時的に紛争は沈静した。

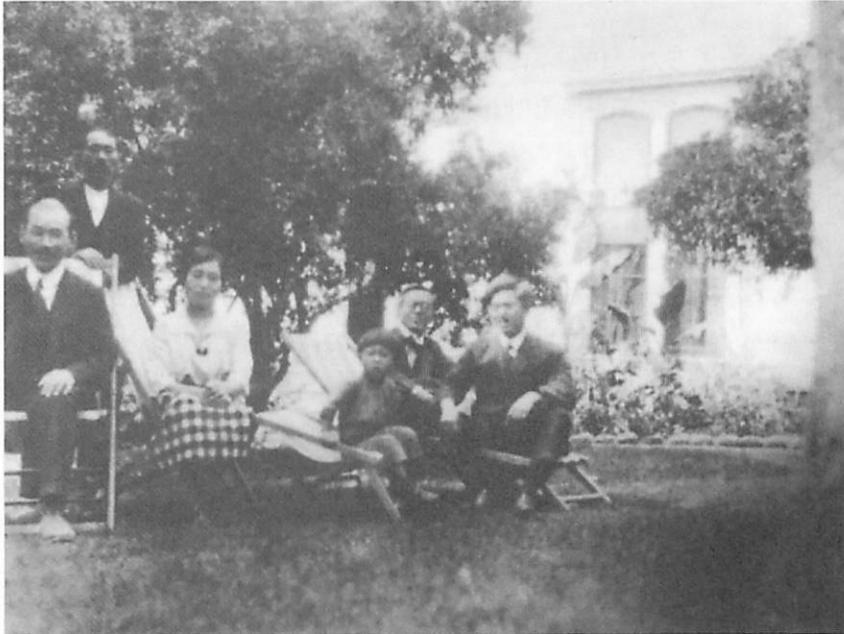
一方で長沢は禁酒法で生じた事業の穴を埋めるための対策を考え、競争の激しいグレープジュースやブドウそのものの販売ではなく、キングと力を合わせて滋養強壮用の薬用酒の販売に乗り出した。また調理用酒（シェリー）も販売した。彼は当時横行した密造や密売などは決してしなかったようだ。怪しい密売業者が売ることもできずに残っていたワインを譲ってくれと言ってきたときにはその目の前で樽をたたき割って拒絶したという逸話が残っているほどである。

禁酒法下にあっても自家用の酒を飲むことは禁止されていなかったもので、長沢は、世界中からやってくるお客たちを貯蔵していた極上のワインでもてなした。エジソンやジャック・ロンドンをはじめ、著名な歴史家や有名なボクサー、カリフォルニア州の副知事などそうそうたる人物が長沢の客となった。

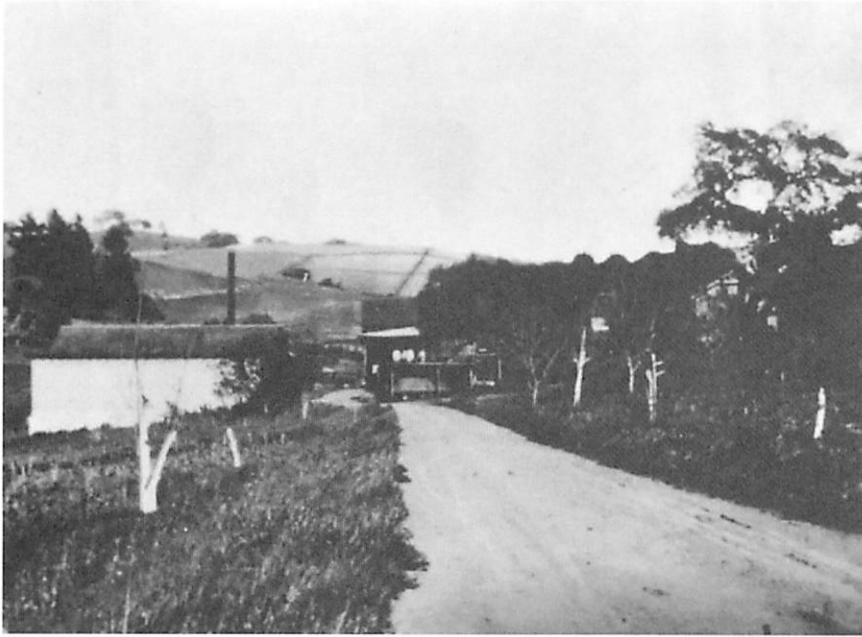
ところで、このころに生前に唯一書かれた初めての長沢の伝記が書かれることになる。

4. 「バロン・ナガサワ」「ブドウ王」の永遠の別れ

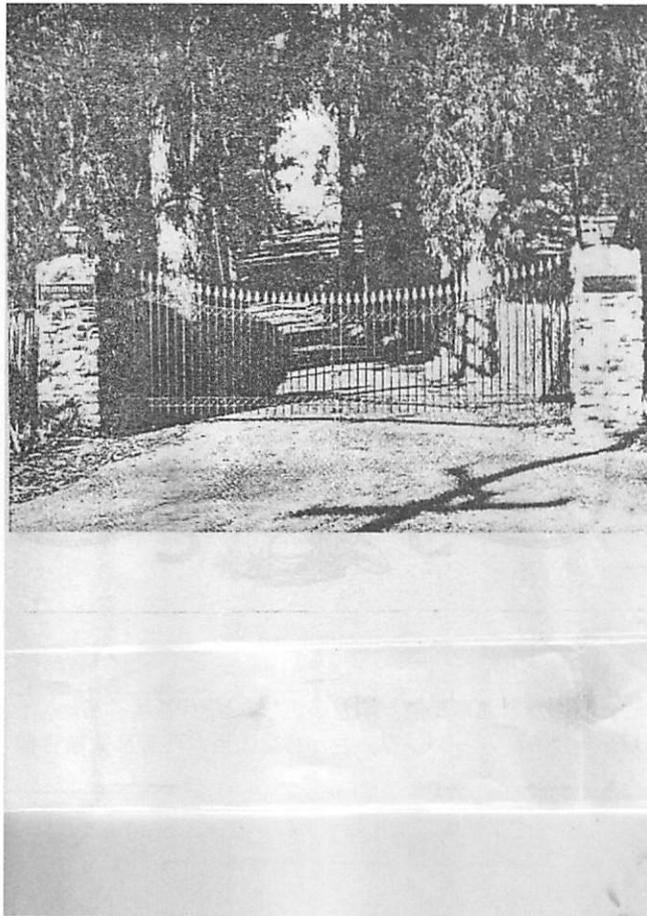
長沢は従来自らの肉体を清浄なものとして尊び、食べるもの一つとっても気を使っていたが、このころにはあまり健康に心配りをしなくなっていて、葉巻を常に吸い続けた。それに伴い全身がかなり弱ってきていたようだ。しかし、伊地知家の人々、特に共喜とヒロは全力で長沢の世話をし続けた。



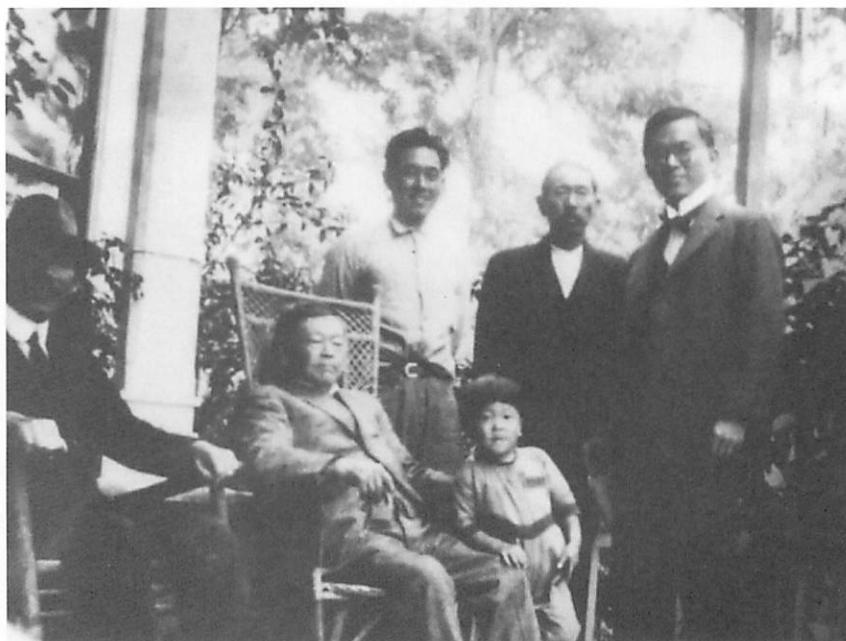
長沢の家族たち（共喜 [後列]、ヒロ [前列左から2人目]、幸介 [真ん中の子供] がいる）と西春彦領事官補 [右から2人目] と今村明恒博士 [左端]



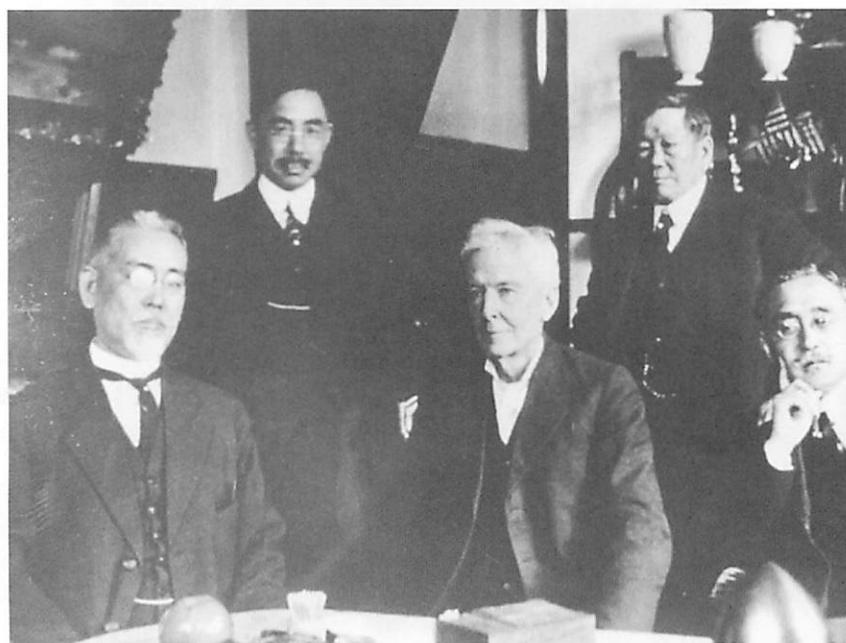
長沢のワイナリーに続く道



長沢のワイナリーの入り口



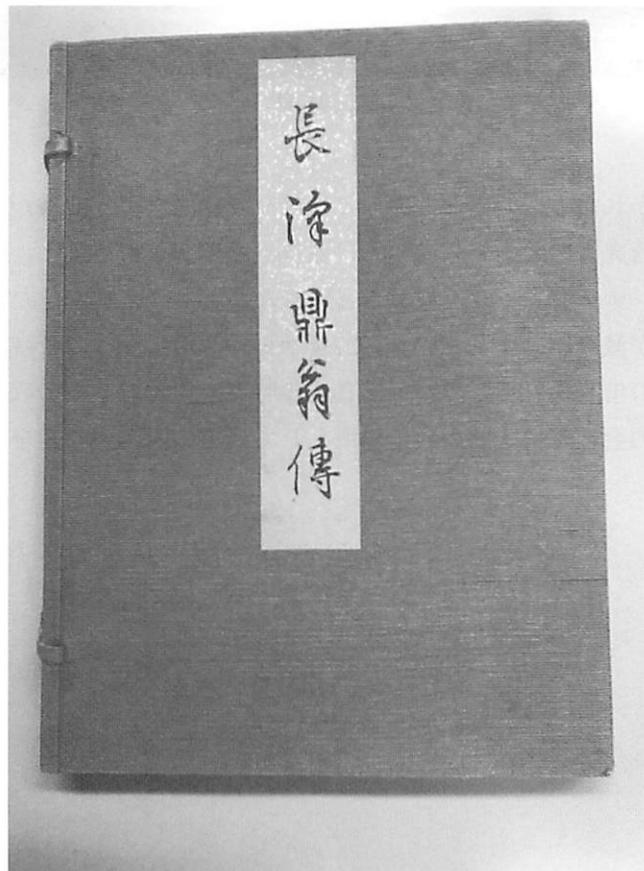
家族（共喜 [左から2人目]、幸介 [長沢の右]）や西春彦領事官補 [右端] や今村明恒博士 [左端] と長沢（70歳くらい）



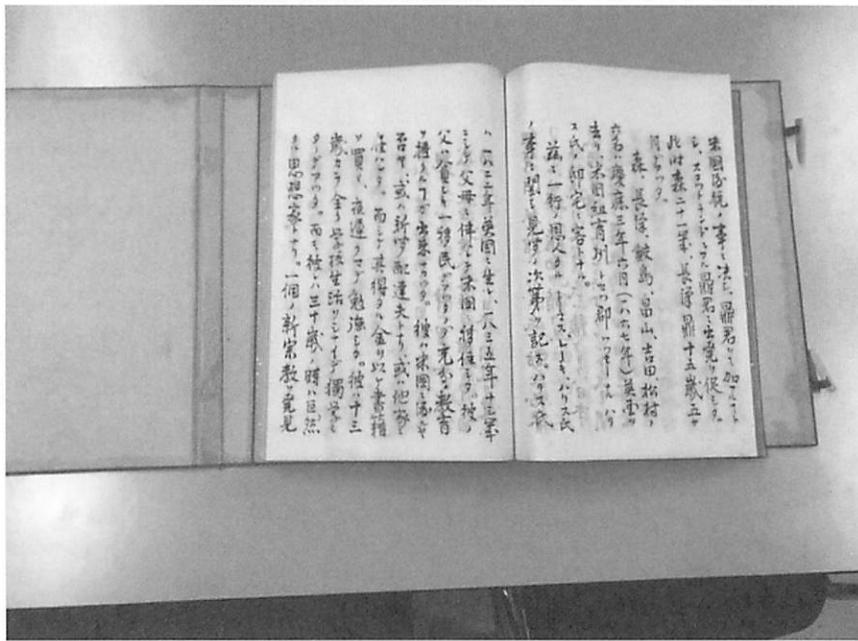
有名人と。右端が新渡戸稲造、隣が長沢（60歳代後半くらい）、真ん中がルーサー・バーバンク、左から2人目が西春彦領事官補

長沢の初の伝記（手写本）が書かれたのは、彼が72歳の時、1924年（大正13年）のことであった。友人で長沢を尊敬していた鷺津尺魔が1924年7月13日から18回にわたって日系新聞『日米』紙上で連載した伝記である。鷺津の序の日付は1924年4月29日付なので、実際に書かれたのは連載より3か月ほど前のことだったことがわかる。そして、新聞連載を読み、かつ切り抜いて保管していた友人で住友銀行に勤めていた川勝正之が共喜の妻ヒロに会った時、ヒロからこの伝記の連載を伊地知家で長く残していきたいと聞いた。川勝はその願いにこたえて全編を手書きして長沢家に贈った。川勝の序の日付は新聞連載の10年後の1933年1月である。長沢81歳、亡くなる1年前だった。

世界に一つしかないこの伝記は現在鹿児島国際大学に保管されている。丁寧な字で書かれており、しっかりした箱もついている。同大学には現在長沢鼎の常設展示室が設置されており、子孫の方から寄贈された貴重な資料や門田明先生のご遺族から譲り受けた研究資料約400点（うち長沢資料は約100点）とともに、この伝記も所蔵されている。この伝記は、



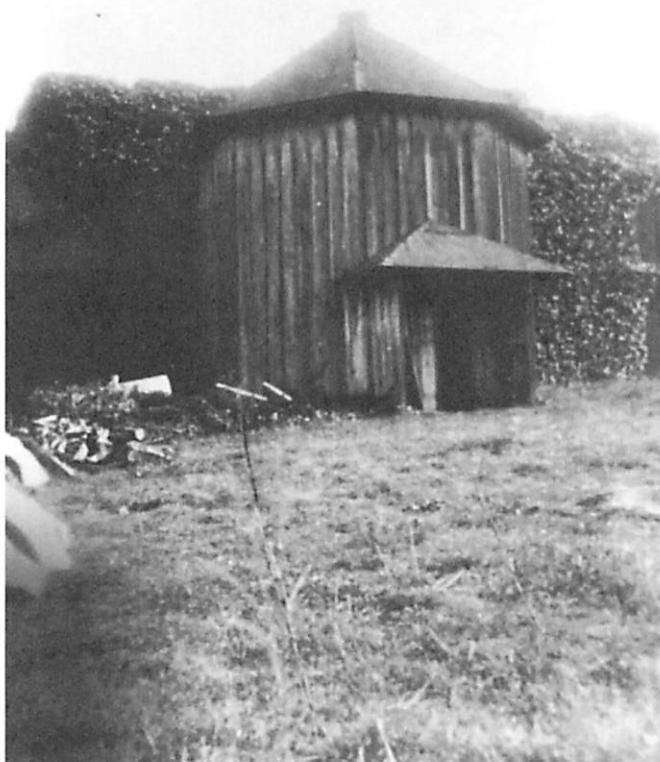
鷺津尺魔の『長沢鼎翁伝』



鷺津の長沢伝の手書き部分

長沢が亡くなる前に書かれた唯一の伝記ということになり、聞き書きで書かれている部分も多く信ぴょう性が高いので、研究者にとって信頼のおける決定版伝記と言えよう。

さて、長沢はフォウンテングローブを処分するようなことは考えなかったもので、当然のことながら禁酒法の影響で収入が減り続けてしまい、1927年から1933年にかけて資産の一部を抵当に入れて5～6回にわたり高額の借入れをしている。1925年時点で約20万ドルの収益があったが、賃料を稼ぐために同年には他の会社に滑走路の設置場所として農場の西南の一角を貸したりしている。



ファウンテングローブの納屋の一つ

ところで、日本にいる親戚とも付き合いがあったことはすでに述べたが、その中で最も親しくしていたのが赤星鉄馬だった。鉄馬は、長沢の弟で赤星家に養子に入った弥之助の長男である。弥之助は港湾建設により建設業で財を成した人で、鉄馬もまた父親の集めた骨董品を売り払ってかなりの資力を誇っていた。1930年に長沢は鉄馬からやむを得ず25000ドルを借り入れた。また1931年も10000ドル借り入れているが、30年の借り入れと併せて生前にはついに返金することができなかった。ただし、この負債は1935年にすべて長沢の死後に遺産で返済されている。

さらなる問題が老いた長沢の身に降りかかった。この厳しい時代には他の人々も厳しい状況に立たされていたのであるが、長沢の代理人で親しい友人の一人でもあったジョージ・キングが投機に熱を上げ1929年の大恐慌で破産したのだ。彼は無心のため何度も会いに来たので多くのお金を貸してやったが、返済の兆しがないので長沢はついに訴訟を起こして差し押さえをするしかなくなった。この年にキングは失意のうちに亡くなった。

その直後サンディエゴから再びロバート・ハートが要求を突き付けて、長沢に対して訴訟を起こした。1931年1月に公判が開かれハートは3万ドルを要求したが、長沢も弁護士（ウォレス・ウェアとジョージ・マーフィー）を立てて争い、ほぼ勝利した。ハートはカリフォルニア州の最高裁まで上訴したものの、退けられた。



晩年の長沢鼎 (70歳代後半くらい)

長沢は甥共喜の息子である幸介少年を孫のように深く愛するようになっており、当然のことながら幸介にワイナリーを継がせたいと思った。しかし、1920年に可決された外国人土地法が1923年に発効するとその夢は難しいものとなった。長沢の財産は顧問弁護士のウォレス・ウェアが管理することになるが、ここには不安材料があった。ウェアは勤勉であったが、アメリカ人であったし、ファウンテングローブへの愛情を持っているというわけではなかったのだ。

外国人土地法の可決前に財産の一部を少額だけ幸介に譲っておくというのが、とりあえず長沢にできた精いっぱいのことだった。1934年1月に禁酒法が廃止されたが、これも長沢にとっては手遅れであった。しかし長沢は挽回を図るために、ファウンテングローブの人となっていた佐々木英吉(共喜の義弟)を代理人としてロサンゼルスにファウンテングローブの支店としてのワイン販売の株式会社を設立した。ワインの販売についてはロスのE・C・ロマーノが代理人として担当した。



80歳くらいの長沢（最後の写真と思われる）

長沢はこのころから、つまり1930年以降体力が落ちていき、有名人の訪問客などをもてなしてはいたものの、1934年に入ると健康状態は最悪となった。彼は動脈硬化が進み、うつ状態になった。もはや回復は望めない状態だったので、主治医のフィリペイト・ボナベントゥーラが頻繁に往診をした。ボナベントゥーラは長沢と親しくいろいろ語り合ったが、長沢は仏教や儒教や神道の思想こそが信条だと述べたそうだ。この思想こそが武士道精神であり、彼が新生兄弟社の思想ではなく薩摩の武士道精神を自己のよりどころとして堅持しつづけたことがわかる。

このころ E・C・ロマーノはロスにいて、ワイン販売以外のことについても長沢の仕事の代理人になっていたが、1934年の1月頃に長沢はロマーノにファウンテングローブの一切、つまりワイン事業と地所を売却する意志を伝え、買い手を探すようにと指示をしている。ロマーノは1月のうちに買い手を二人見つけていたが、長沢の死でご破算になったのだ。

長沢鼎は1934年3月1日に亡くなった。82歳であった。誕生日からわずか10日目だった。その前日に彼は家族やボナベントゥーラ医師や周りの人々を自分の部屋に呼ぶように言い、辞世の句として「もうお別れの時が近くなったようだ。……死を美しく迎えたい」と言った。誠に武士の最後らしい言葉である。

文献

- 犬塚孝明 (1974, 1981). 『薩摩藩英国留学生』 東京：中公新書.
- _____ (1986). 「翻刻 杉浦弘蔵ノート」『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報第15号』 鹿児島：鹿児島県立短期大学.
- _____ (1987). 『明治維新対外関係史研究』 東京：吉川弘文館.
- _____ (2001). 『密航留学生たちの明治維新 井上馨と幕末藩士』 東京：日本放送出版協会.
- _____ (2007). 「1866 慶応二年 薩摩藩英国留学生」『世界を見た幕末維新の英傑たち 咸臨丸から岩倉使節団まで』 東京：新人物往来社.
- _____ (2013). 「長沢鼎—祖国近代化のはざまで—」『新薩摩学 知られざる近代の諸相 変革期の人々』 鹿児島：南方新社.
- 門田明 (1991). 『若き薩摩の群像』 鹿児島：高城書房.
- 門田明, テリー・ジョーンズ (1983). 『カリフォルニアの士魂——薩摩留学生・長沢鼎小伝』 東京：本邦書籍.
- 上坂昇 (2017). 『カリフォルニアのワイン王 薩摩藩士・長沢鼎—宗教コロニーに一流ワイナリーを築いた男』 東京：明石書店.
- 熊田忠雄 (2016). 『明治を作った密航者たち』 東京：祥伝社.
- 森孝晴 (2014). 『ジャック・ロンドンと鹿児島』 鹿児島：高城書房.
- 森孝晴, 三木靖 (2016). 『鹿児島歴史の旅—島津藩政と「薩摩藩英国留学生」—』 (平成27年度特別講演会・かごしま県民大学中央センター連携講座解説冊子) 鹿児島：鹿児島城西ロータリークラブ・鹿児島国際大学
- 南日本新聞社編 (1969). 『郷土人系 (中)』 鹿児島：南日本新聞社.
- 長沢鼎常設展示室所蔵資料 (鹿児島国際大学内, 約400点)
- 志茂田景樹 (2008). 『蒼翼の獅子たち』 東京：河出書房新社.
- 多胡吉郎 (2012). 『海を越え, 地に熟し 長沢鼎 ブドウ王になったラスト・サムライ』 東京：現代書館.
- 鷺津尺魔 (1933). 『長沢鼎 翁伝』: 鹿児島国際大学蔵
- 渡辺正清 (2013). 『評伝 長沢鼎 カリフォルニア・ワインに生きた薩摩の士』 鹿児島：南日本開発センター.